



新板
入

赤鷲揚子船乳質 三三卷



へ遠13
1.619
9



1613
3

赤馬帽子部 字貨巻之三

郷土文庫

武

古風をほられ 勢よまゝく 其さのちり

まゝに勤る一人のひさり

附リ 左ふふと 志んを 舟中 老れ びり 二階

久のまきのをからぬれ 一と

類のまの福人の相願のまの太人の相前にはほほの
あふ人のまふふとくかきまき 福も人よあまの
かかんまの河よかんはまきで ねのほほひとま
あかかんの蛇の部でもとまきとまき けいあまらま
かきまんのあまらまきとまき 虚かれほとた
ふまゆり 一の部町人のまほらまき 一あまらま

同

十の富

同屋の二見世米銭屋の重右衛門といふ又十郎の舎
がらうが泉列堀らとあり内宅つと力一付は持出し
中て手彦う角とはわけころ男。元六といふ大一は
二回高賣れ銀持り嫁とる男。姑嫁子共中むひま
手代ト人多くかへて警昌は善きまけらげ。金左衛
美にそれたらひれ多し男。別して徳一の才一が先世
てい徳と兼の湯。金右といふと川美。さて好角とい
才一が義をまきれ。浄うると角力。金右でい義持と
徳一付は銀のづせし。かへてうづひは志らひづと
たがあま内かき。持れ中にく浄と徳といふこたの
いしせしうと。おまうとたはだくさんとう事
このまい事。とくにる。柏子のまひ。子ま生得か

まじあひのれ。徳をまづのとし。十八の年。うら
なまう。才子にありま。後兼ともあつた。まは多し
二十八の年。まて十八九年。れ。修りか。りあ。を
のうづ。と。の。と。切て。あ。ま。て。今。又。十。の。銀。は。成。て。身。子
さ。の。ふ。か。り。て。お。く。別。深。の。相。友。あ。り。あ。て。あ。ま。り。あ。ま。り
う。ら。ふ。ま。ま。と。お。ま。が。お。ち。ま。せ。ぬ。ま。ま。と。公。女。う。あ。ま。り。あ。ま。り
かり。そ。り。あ。ま。と。目。懐。き。ま。ま。の。お。け。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り
ま。ま。に。お。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り
かん。さ。よ。柏。の。と。肉。外。の。もの。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り
よ。ま。ん。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り
も。け。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り
た。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り

うらうらとせむらひもたまきよめとゆ言はるのいづけわ
るしそあしりもき。金太夫ら此身更人毎日をふら安
さより出まらりける。乃二町下の所れたど入屋の坊乃
親親中へを物よつらとたどこ入と又つ六つ酒をう。い袋
物屋の利物といふの二十二ころ。利者も女房の二つ二つおし書
と見えて目々鼻ぬけそよる毎日のよいそなり。たと
はる娘の子かいらしとよいおしけきや使のやうと。金太夫
たどこ入代取拂業と持物娘とてさるるくやま
きね子とたつひけきで。かき書氣よ交くとどれらるとの
情こそて雲帯といふ子があふいしとやとて茶話あるひは
あひくし妙茶の世をどてたどこころづく吸わしきけ
もどきを中でおとぬきし。金太夫の親は那はるるんは

あつと書のもちとよい夫婦出ておどおどあらしひも
ごひのちのちうまのこつとちやうと太白のぬ振こし
うらう内へ利女夫婦とて門送りもらに金太夫
知ふよと道おしく通うはいで。利女のみさるるか。此
物もどあひらていゆらと世がどて女目づらに
百ももるるんごやうよぬ教も世よけて利女が教
べのはりきれたて。昔の若きま播たさへい設きまうり
ざこ場の十を米新をまう。後名へ保式といふこりま
あつと自標のしりら。お利女が浄らりいゆらとねと耳切
ちんまゆれね好る。つよ女房がぶが志んうそと人儀を
うれねる。いし金太夫とあつがよ入てもおららあ
けいこまこ中とへらうそ今田のあいの浄られ

ういどうも家世をいざせぬ更昔がたのい願ひの女六年
あよ回索の今統ほが美花で盛衰記の浄らう政ま吏の
まきんが二切で源をが勅高跡前の浄をまづ二後月の色
川をが縁をまう日後月の浄の候いや又け時のやうあや
ろいまゆゆいあうこも河代と見くく今時の浄らうか
うらとつふ名がうりこらうへま世日又年あれたまよけいこ
まごま由人まうゆくとうまもがうまうとくまれまじ
てもまふんまをむ利女夫婦ハかんをくまうくひまん
且ねねはゆをを救うひてまきとせトまもまうま
の二階のかく屋後てかうらまふれど妻人いこまをせれ
ゆがどたままかおるままも一てもあどゆりま(ま)まとじ
うらよとるういた今あまや南原のあまつづひの獄人二人を

うら儀事女事裏が二所の信風育うまふ人よあぐとれ
おのまてハ私家内親子と人まをかおれやまこととんむ
金たふ取てもるひんうほしと先ま疾はあけくやとそ
時頼記言の候とゆくまうがさりとてむまやうにたまるん
こまうなまめくまを相子れらひ浄らうるまじ。利女
史ゆがお人はいやうふそ形けめんをうて再んそを
すのらぬ金たうにいゆく自身のまをまともむくひそれ
らまおく利女をそのゆくまけら相あつ時利女妻房う
まうへそのあもさる通を年こられふは命一人のむすの
ハちんしそまのむ入まひのま子ましこま事まこまらう
まうにんまてんたのまこまのり院の六借金とてまな
入信てうらういで大金かりうし決まもあハつれおまの



町の茶屋に親旦那いけぬ侍らとやめくまをいふびく
くりにくろこそ幸よお入て娘のそんとさうけつ横を
娘も氣むつしくおりろさよんせうけてはまていよき代
は病氣まきさるやよせよふ小神ころらてあつそと女
房子よぶあだんすまごがふふいさよふ心付と侍ら
のめやうまもやうめでましくてま合ぬわぢらさうせんお
りひがおれがもたらしとせうしゆんそご切と先を
今よの振帯つとまごごでいりていりて金おひさるお
を西れそごやへけ度そご切細らゆお疾メを今ねら
咄よんくろと書まわらういいうんと振帯て侍らとめ
十もむらもしては被たをのそむえおとらりしう九舎月
の板かへ隣家のすんも入まごごへ使る娘よえりくう金ねら

の侍らうまごむかして今ねらうして今ねらうそごま
てわよ。谷がはなの横もろどとてまを虫接らと親の
志るう娘あおまごうのそと利女夫婦悦で今ねらうんごも
侍らう一二候もそご切あんでそご被一件と形下ん書
あしり中後と志のらひ侍りかけらう経る今ねらうも月久
とご小二階とらてそご月悟の敷付がふをあてそごの
らとつらまら道亭まごがぶせんれ幸ささうづしるまご被
る娘あおられり細るの二百むらうと茶屋んよ書てあ
とむきくそごあまごでいりよもあねてまやうにそご
とあがらまらそごあも出すとまひと云いぬ書原れ之候
目とまらそご一候侍てそごせられぬ内れその候とら
今二候くろま書せしうそごそごいひのむとあが

病氣のうつらんよまごごもるうーれおたのこもひりに
りつこくぬんまうーとまよませー後利女へ何でも有
がごいごうーと親子二人合帳がむごりんらもやまーが。
系ゆるひ二に後うりて思ひかよそむ切ぢあでん志でや
うーハワ後アうーよごのづんでけしきよあひてお后花は
目とこらうさせんよめさげん。と味縁や此書降らりと系
かどまをいごらめのみあまひごし何れ自惚あして鼻とご
やうさんよも。梅もいつりも又たままむらとあで清もけけが
おりらひゆいさうくもがのぢらら。娘はやけること親の
ためよかりゆくとおひ合帳が後もしにまらり勤てくまをハ
あまもどらむがらむびきてそらく福むりかぐでい志んれつ
うとらうおそらうーい後とらんそかり時合帳ら山科のくま

おし中女房とテカせとせりぬの取以たおれも
わらむらが河の海系にどのらかとお帳もさんまうさそ
あてフこ書まおおぬくのりかひで清らまくと。娘はか
るが福もよ入のらうーとまらんとま。福のまさんやごう
よまーいあまひとらむらむげらうらまらるが。かやニふれ
らり口らまら送まごごんごうおらうーとれ下はく揚骨と
あまらうかーいまこくに慶子にまもひとらもあうかりあ
利女がらうさあも娘のふりうよなまはまこーが合帳らも
こまのぐるまごでせんまらくまがーゆの系圖えて思ひ
まの送門するこゆーまらまごごもからんまもまをあま
あまはらま着人ぬけても病もまらり。娘おおハままらう
揚骨けしてわらうまも合帳ら山科合帳らうよらでたのま

清らうくみしてさうせしにそまううけ入振借せしふふ坊を
男がうけつむしうう借物うけまづへせぬりしうこれ
立振うらうハ突止るるハ利今夫婦の言よそいふ
の松が振之メ又百丈屋といふ家ハ。感あるはるはる
の振るべと毎晩やとんで清らううたれあは二丁づま
ううくの拂中そふ河の借物先とんむもまの男上
ふ物先にあうら河振物の親父やむとこがらあうりし
あまびよあうりしううこは抱入て付也ままら南をれん
た。まの家の家業とたるとせいしゆととととととと
物夕神仏と行おらうととらうそけく生養れ夫とあ
つと河の質あうらうそそのかりとに天の賜人の一生何
んがらるるわーまたのーんとなよ。ば利今夫時あ

人よびるらうしてさうの男あうらうんぎ。あー親よ
ぬあ合たうと子孫ハの意ある人肉體で金持あ公府
ゆんはとまきく太極よりか念れ骨つぎんめて振わけハ
るとりーがたりそハは合して一といふ事。やと利今夫婦ハ
是よころまよさうさいあうとため思つぎんあり

二 流石に神のよあんう魂の氣能くやーとこのむ
借屋れあふん

附リ 志年にあてもいんぞこまの氣にうかふう候の振ま
るんかうけらう。まん中といふ。かりうかこまの膚といやて教
とまひーハ古人の行け後といく。すうもかそま入がのあ
くあつんかむおらうかま。と目あ。見家。まらまは。は
とま。は。かの清らう好合たう。石まのよ。た。は。の抱

屋敷をけりか森の森十軒ぞうりの小借屋裏よは去屋と
建る七借屋を流る賣れ小神女ものまじりし月よ信命と
よその八借屋紙屋のわのい五賣の小高又世と出賣し
信女ハ浄らりれ拾南をまといし福ぬはけき夫素人のちで
ハ切なき浄らりを取こじしとて多代とんまをあいと奉よ
殺十人まてぬけける魚海病く疾の治るまでと信家の
歌もまへりけは去屋の向して二つとみかんがく金たつ同
高賣の本と是ハ貸ととあ業にいする百屋七たつとい男
まけのが極もつじいかなる流好初からうとてしとかりし
今早よ金たつとく目此まこ流のは信神文とておと
かりとけりるぐとてう人ぬを可うううあよ成てしよ
く面白といわぬ。おとて流のまよとていさしと

のけりあけりまも口のうらにぐがいつとてういとうと
我れを流のよまはるまくと自ぬこと流て流流のよと
いらげよもうび浄らり小ぢがどうもあの人外のやうよ
あまこつうけ合もせん所依の糸金やうにて年むいな
人が流ぬえうぬとるることとて流を流るでけりてきた
どうがんのさげしりぬあけりし解さ小いひでんた
らりとゆえとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
しうむんをまじりやがけりて貴人ゆき女房子にまよせ
て人とこよもまのやうにならう。秋ああけじゆりおれぬ
よせつとてあつとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
けりか彼所の人金たつが信屋よかり浄らりやとて是後ま娘い



夢さりし高ひくさひーがをたより清り栞南とほせり
とらほし水こして着るるせんく夜く町で言ひたげ町の年
あつ後申でに心ある人更こんとねとてゆほちとせど。七ちあて
あつさひのころこそゆりた云らんがげ清りころり伊めが南
清りより仲七といひあうー物あひい音色麻の徳とく職る
アーが。是もさうさひと好百屋七ちあつと先生よたのそ毎秋さくに
郎ーがある秋七ちあつと仲七世よりハ。はがれ此通松とあつあ
清りやをばいんく。お子たがうまうとて秋かへハつまてまこ
ツ花梅やまうーとてこまらまもと秋あもれ妻が利事あうく
さうら此清りやハらしき集り女れもさう志だりー雲てあり
まーこの時ころは白あて伊めハ先生教もそお子れあひ流よじ
ひい九えぬハスーうさひこよん久ぬがぶふーや病なでも出せ

ぬしとさもてお子の内よりハまとい子男うアハいやのう九
まハ依あまをやろつとらとともかをにるもさちらひはう
ふたまがーとあうーろり洋月もを綱をまがう更お子个
てふたまへーらこんでの事はととど。伊めがあたまの先生あ
で音曲ゆれうらでふたまがーりどト他るものいあひ九え
さぬハあつと物ぞん。ふたまあひこまうーりまハ隠るうらこ
ういづまーとあひといつとまて並のら依たまうーといはたが
いふさぬこれハ先生たれまのまの付あややくさまーいば。
まもこれまてさうねのころ。いんた文音もよとてふたまあ
とこいさしとあひづらあよさひのまがもれの後たまをた
よあまののいさひとあひづらあいさうござります。何あうく
七ちうよらうすまて七ちあつあゆしてまに後と立梅も

それいふひもとぬうと。然るに一、して、法と此後、
 ようしてけつに神といふて、幻、神、楽、お、大、名、や、に、及、び、
 町人百姓の従事するに、儒、道、あり、く、勤、を、傳、ら、り、し、
 も、儒、道、の、を、め、り、し、て、道、と、由、ま、ま、し、つ、よ、ぬ、と、い、ふ、を、
 け、げ、い、い、げ、ゆ、と、云、ま、せ、一、つ、め、さ、お、の、世、は、自、身、の、も、
 が、お、少、け、り、ま、さ、と、ま、ま、と、夫、に、ま、ま、は、お、人、を、せ、
 下、の、信、女、も、ま、ま、も、今、た、つ、信、女、も、お、ま、ま、も、
 せん、と、い、ふ、は、お、り、好、の、今、た、つ、お、ま、ま、も、お、人、を、せ、
 志、ま、こ、り、ゆ、ま、何、こ、も、幸、横、下、お、あ、り、ま、ま、の、信、女、十、
 松、子、伝、り、ま、ま、も、ま、ま、も、信、女、と、い、ふ、に、死、し、ま、
 へ、ん、て、は、お、町、の、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、ま、ま、も、
 ろ、の、お、ま、ま、も、と、い、ふ、と、ま、ま、も、ま、ま、も、ま、ま、も、

お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、と、い、ふ、と、ま、ま、も、ま、ま、も、
 ち、は、く、ら、ひ、い、て、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、又、お、の、町、は、
 信、女、を、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 ぬ、と、い、ふ、は、又、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 百、七、十、の、信、女、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 と、儒、道、の、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 ち、は、お、の、信、女、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 と、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 し、は、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 と、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、
 お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、お、ま、ま、も、

夜もして大ましの紙と多しよ。さうこれ借屋までわらふと借屋
 傍の町人が耳入を日尋ふ事ありとやうとをを費してゆふゆふ
 のちかゆりせと。とてまて七たう大に證たふそ今界にけ
 人へ海をのあせらる中にも彼借屋の主人り付借屋より借
 六つ後あての中まて之に借り程のてあまの物入さるに紙
 で九中言及といふ用。紙も存れ外を借りてさうとさうある
 かほに。借りて彼の借屋の合たう借屋あてしういふ言ひは
 付。借りてあてに家町をのま上紙がむとてけ。とて言ひは
 買てのらひ借屋のたう言とあてやふとて下女の一人つよ
 中にかあある合たうあてあてして借りてとて言ひは
 後り。紙も存れ中のさう言ひは借りてのさうあて
 未島嶋子初言借屋まてく之終

